

「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成

—多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養成するプロジェクト—

森 朋子

「やさしい日本語」は、日本において、多様な人々との言語コミュニケーションを可能とする共通言語である。筆者の担当する授業「言語コミュニケーション」では、多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養成するプロジェクトとして、「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成を行った。その結果、ディスカッションを多用した授業運営により、教室が多文化共生の場となり、「気づきによる学びの実現」と「受講生同士の密な交流の実現」という成果が得られたことが明らかとなった。

キーワード：やさしい日本語 多文化共生社会 言語コミュニケーション 気づき
プロジェクト

1. はじめに

「やさしい日本語」が専門用語として広まったのは、1995年の阪神・淡路大震災がきっかけである。

阪神・淡路大震災では多くの外国人も被災したが、情報は日本語と英語に限られていたため、それらの言語に不自由な人は必要な情報を得にくい状況にあった。そこで、社会言語学者やNHKアナウンサー等の協働によって簡単な日本語で情報を提供する方策が考えられた(庵、2016)。

外国人に通用する言語といえば、英語を思い浮かべる人が多いが、一般的に信じられているほど英語は共通言語ではない。岩田(2010)によると、定住外国人の62.6%が母語以外に出来る言語として「日本語」を挙げており、「英語」の44.0%を大きく上回っている。また、全ての外国人へ母語による情報提供ができれば理想的だが、現実的には無理である。

そのような事情を背景に、阪神・淡路大震災時には「日本語」それも「やさしい日本語」が有効

に働いた。それ以来、「やさしい日本語」は日本に定住する日本語が堪能ではない外国人とその他の人々を結ぶ共通言語として認識されたのである。

それ以降「やさしい日本語」の研究は、「災害時の定住外国人」から、「公的文書」「ニュース」「幼稚園」「障がい者」「外国人観光客」等を対象として大きく広がり、多様な人々に必要とされていることが明らかとなった。「やさしい日本語」は、日本において、誰にでも通じる共通言語なのである。

日本が多文化共生社会に向かっている中で、「やさしい日本語」を使えることは、多様な人々との言語コミュニケーションを可能とする力となる。これからの社会を担う若い世代にぜひ身につけて欲しい力のひとつである。

そこで、筆者が担当する「言語コミュニケーション」のプロジェクト(以下、「プロジェクト」と言う。)として、「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成を実施した。本稿では、そのプロセスおよび結果について報告する。

2. 「やさしい日本語」とは何か

まずは、プロジェクトの前提となる「やさしい日本語」とは何かについて見ておきたい。

2-1 「やさしい日本語」の作り方

伊藤・中尾 (2015) は、「やさしい日本語」を「文章」と「音声」に分けて伝達の仕方を提案している。ここでは、プロジェクトで扱う防災案内が読み物であることから「文章」の伝達の仕方のみを紹介する。

- ①簡単な語彙で表現する。
- ②一文は短く簡単にする。
- ③擬態語、擬音語は避ける。
- ④外来語の使用に注意する。
- ⑤動詞文を使う。

揺れがあった→揺れた

- ⑥曖昧な表現は使用しない
×「多分」「～たりしている」
- ⑦二重否定は使用しない。
- ⑧文末表現を統一する。

また佐藤 (2016) は、災害時の外国人への有効な情報伝達方法として掲示物を挙げ、その中で使われる「やさしい日本語」の基準を以下の通り挙げています。

- ①見出しだけは、多く居住する外国人の言語で複数書く。
- ②使う漢字や、その使用量に注意し、漢字にはルビ(ひらがな)を振る。
- ③文字や振り仮名は大きく書き、行間も広くとる。
- ④ローマ字やカタカナ外来語の使用はできるだけ避ける。
- ⑤できるだけ内容に関する絵や地図などを付ける。
- ⑥一文はできるだけ短くし、分かち書きにして意味を取りやすくする。
- ⑦掲示物を作成した機関や団体名を記入する。
- ⑧作成年月日や掲示年月日、掲示時間を記入する。

以上の通り、「やさしい日本語」を作るためには、簡単な語彙および文型を用い、外国人が苦手とする擬態語・擬音語、外来語、曖昧表現等を避け、表現を統一することが必要となる。さらに、言語

表現だけでなく、見た目の分かりやすさも重要な要素である。

2-2 「やさしい日本語」の有効性

それでは、「やさしい日本語」には、どのぐらいの有効性があるのだろうか。

松田等 (2000) は、初級後半から中級前半程度(日本語学習歴が6ヶ月から2年程度、あるいは日本滞在歴が5ヶ月から2年程度)の外国人36名を対象に、通常のニュースと「やさしい日本語」を用いたニュースによる聴解実験を実施し、理解率の違いを検証した。調査に使われた文例のひとつを以下に示す。文Aが通常のニュース、文Bが「やさしい日本語」を用いたニュースである。また文Bの□は短めのポーズ(約0.5秒)、■は長めのポーズ(約2秒)を表している。

<p>A 神戸市消防局によりますと、けさの地震直後から市内の各地で起きた火災は、なお兵庫区で4カ所、長田区で4カ所などで燃え続けています。</p> <p>B 神戸市では□火事が□たくさん□起きています。■兵庫区□長田区□では□まだ□火事が□消えていません。</p>
--

結果は、通常のニュースの理解率が約29.3%であったのに対し、「やさしい日本語」を用いたニュースでは90.7%であった。「やさしい日本語」を用いることで60%以上も理解率が上がったのである。

ここで注目したいのは、AからBの文に書き換えられた際、平易な語彙、文法に言い換えられただけでなく、内容が必要最低限な情報に絞られていることだ。例えば、「神戸市消防局」からは「消防局」が抜けており、兵庫区ならびに長田区での火事の発件数(4カ所)は削除されている。それらは、ニュースを聞いた外国人が状況判断をしたり、次の行動を起こしたりするために必須のものではなく、むしろ重要な情報の理解を妨げるという判断による。

2-3 まとめ

以上をまとめると、「やさしい日本語」は次の要素で成り立っていると見える。

- (1) 簡単な語彙や文型、外国人にも分かりやすい表現を使う。

- (2) 見出し、文字の大きさ、スペース取りなどの工夫で見やすくする。
- (3) 必要最低限で重要な情報に絞る。

(1) の「どのような表現を使うのか」だけではなく、(2) (3) の「どのように伝えるのか」という要素も「やさしい日本語」の使用目的に照らすと、大切な要素である。

3. 授業概要

「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成プロジェクトは、2019年度「言語コミュニケーション」の授業で実施された。「言語コミュニケーション」は、東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科2年次専門科目として、2019年度から開設されている。以下は、授業概要である。

3-1 授業の到達目標と方法

授業の到達目標は、「多文化共生社会の担い手の一員として、多種多様な相手との言語コミュニケーションについて学び、共通言語である「やさしい日本語」の使い手となる」ことである。

授業の方法として重視したのは、「教えない。教員が提供した材料をもとに自分達で気づく」ことであった。したがって、プロジェクトにおいても、「やさしい日本語」という用語等の簡単な紹介はしたが、本稿2で述べたような先行研究からの要素等については説明していない。時限数にゆとりをもたせることで、受講生の気づきに任せた。授業では、課題ごとにペアワーク、グループワーク、クラス全体でのディスカッション等を多用している。それには以下の2つの目的がある。

- (1) 意見を交換する中でひとつひとつの課題についての理解を深める。
- (2) 課題について意見を交換・調整し、ひとつの結論に達する、またひとつのものを作成するというプロセスの中で、多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養う。

つまり、多文化共生に必要な言語コミュニケーションについて学ぶだけでなく、教室内に小さな多文化共生の場を作り出し、受講生の体験の場と

することを試みた。

3-2 受講生

2019年度の受講者は9名であった。内訳を表1に示す。

表1 2019年度「言語コミュニケーション」履修者の内訳

	学年	国籍	日本語レベル
1	2年	日本	母語
2	2年	日本	母語
3	2年	韓国	N2程度
4	2年	中国	N1
5	2年	中国	N1
6	3年	中国	N1
7	大学院1年	中国	N1
8	大学院1年	中国	N1
9	大学院1年	中国	N1

尚、この授業では、日本語を共通言語としてコミュニケーションを取ることを目的のひとつとしているので、日本語非母語話者の学生に対しては、授業中の母語の使用を禁止している。

3-3 授業内容

授業内容は、大きく次の4つに分けられる。

- (1) コミュニケーションとは何か (2時限分)
 - ・言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションの役割や機能を分析
- (2) 言語と文化の関係 (3時限分)
 - ・様々な日本語表現の例から、日本語と日本文化の関係を欧米文化と対照しながら分析。
 - ・それぞれの母語で、文化背景と強く結びついている表現を紹介
- (3) グローバル・コミュニケーションに必要なこと (3時限分)
 - ・日本語では曖昧表現が多用される「依頼」「断り」で、外国人も含む万人に理解しやすく、かつ感じの良い表現をめざした作文。
 - ・いわゆる日本的な挨拶文を多種多様な人に理解できるよう書き換え。
- (4) 「やさしい日本語」による防災案内作成プロジェクト (7時限分) (4にて詳述)

本稿で取り上げるプロジェクトは、それまでの

学びの集大成として最後に実施された。

4. プロジェクトのプロセス

プロジェクトの目的は、東京家政学院大学の留学生（新入生）のための防災案内を作成することである。作成は次のプロセスで進んだ。

4-1 「分かりやすさ」の分析

(1) 読み物から「分かりやすさ」の要素を探る

最初に、「やさしい日本語」とは何かを考えるために12の読み物の「分かりやすさ」を各自10段階で評価し理由を分析した。

表2は使用した読み物と履修生9名の「評価」の平均を示したものである。この場合、10がもっとも分かりやすい指数となっている。

表2 分析に使用した読み物と「分かりやすさ」の評価

	タイトル (著者名/発行年/発行所)(URL)	評価
1	スーホの白い馬 (大塚勇三再話/2006年/福音館書店)	9.3
2	ないたあかおに (浜田廣介/1994年/偕成社)	8.0
3	市報くにたち (国立市/2019年11月20日/国立市役所市長室広報・広報係)	7.7
4	くにたち公民館だより (国立市/2019年11月5日/国立市公民館)	7.6
5	Panasonic DVDレコーダー DMR-XP11 取り扱い説明書 p45 (松下電器産業株式会社ネットワーク事業グループ)	7.3
6	はじめての人の言語学 (上山あゆみ/1991/くろしお出版)	7.1
7	五体不満足(乙武洋匡/1998年/講談社)	6.9
8	町田市ホームページ「町田市の防災対策」>「避難広場(避難場所)避難施設(避難所)を指定しています」(https://www.city.machida.tokyo.jp/kurashi/bouhan/bousai/bousaitaisaku/saigaitaisaku/hinanbasyo.html)	6.7
9	NTTdocomo ご利用ガイドブック国際サービス編 p33 (2010.3/株式会社NTTドコモ)	6.2
10	日本国憲法 (file:///C:/Users/NEC-PCuser/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/JBSAKAR1/kennpou.pdf)	5.3
11	沈まぬ太陽 アフリカ編・上 (山崎豊子/2001年/新潮社)	4.7
12	言語学入門 (田中春美等/1992年/大修館書店)	3.6

(2) クラス全体として「分かりやすさの条件」をまとめる

次のステップでは、各自「分かりやすい」理由として分析した要素を大きめの付箋紙に1項目1枚ずつ書いたものを持ち寄り、グループワークを行った。リーダーが1枚ずつ取り上げ、「分かりやすさの条件」となりうるかどうか、似た内容のものはまとめられるかどうか等をクラス全体に問い、整理していった。その間、書記は「同じ内容」とされた付箋紙をまとめて同じ場所に貼り付け、グルーピングしていった。最後に、「同じ内容」にどのような見出しをつけるかを検討し、「分かりやすさの条件」がまとめられた(表3)。

表3 「分かりやすさ」の条件

項目	分かりやすさの条件
内容	<ul style="list-style-type: none"> 必要な内容が書いてある。 量が丁度良い(多すぎず少なすぎず) 内容が項目ごとに分かれている。
表現	<ul style="list-style-type: none"> 説明が十分ある。 箇条書きで書かれている。 文が短い。 やさしい文型を使っている。 やさしい語彙を使っている。 擬音語、擬態語を使っていない。
文字	<ul style="list-style-type: none"> 難しい漢字を使っていない。 難しい漢字には振り仮名が付いている。 必要以上にカタカナを使っていない。 文字が大きい。 見出しの字が大きくて目立つ。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 横書きである。 重要なことが最初に書いてある。 重要なポイントは太字になっているか、色がついている。 イラストや写真がある。

表3を見ると、前述した伊藤・中尾(2015)ならびに佐藤(2016)が示した「やさしい日本語」の要素とかなり重なっている。足りない点としては、見やすさとしてのスペースおよび統一感等であるが、今回使用した読み物は全てプロの手によるものであるため、そこに問題はなかったためだと考えられる。

ここでのディスカッションでは、履修者に日本人と外国人がいること、外国人の中でも漢字圏出身者と非漢字圏出身者がいることで、それぞれの立場からの発言が相互の「気づき」や「サポート」を促していることが観察された。いくつかの例を

紹介する。

<例1>

外国人学生全員から、「擬音語・擬態語が難しい」という指摘を受けた日本人学生は、驚くと同時にどこが難しいのかを質問していた。

<例2>

日本人学生の「漢字に振り仮名があるから単語の意味が分かるわけではないのではないか」という指摘に対し、「読み方が分かると分かる場合が多い。辞書も引ける。」と韓国人学生が回答していた。

<例3>

ある発言の意味を誰かが理解できなかった際に、本人または他の人が、より日常的な表現に言い直す、意味を説明する等の行為が頻繁に見られた。それは、日本人と外国人の間だけではなく、外国人同士でも見られた。

4-2 タイトル・内容・担当者・レイアウトの決定

(1) タイトル・内容・担当者の決定

「分かりやすさの条件」の分析の後には、タイトル、内容、担当者の決定に進んだ。タイトルと内容の決定は、①各自の案を口頭で発表、②書記が項目を立てて整理しながら板書、③リーダーがクラス全体に問いかけながら整理するという順番で進められた。担当者の決定は、リーダーが希望を尋ね、ひとつの項目に複数の希望者がいた際には、じゃんけん等ではなく、自主的に他のものに変えることで決定している。

決定したタイトルと内容は以下の通りである。

【タイトル】「手にとって！」防災案内

【内容】

- 0 表紙…担当者 A
 - ・緊急連絡先も入れる
- 1 災害前
 - (1) 防災バッグ…担当者 B
 - (2) 家具の事前準備…担当者 C
 - (3) 避難場所…担当者 D
- 2 災害後
 - (1) 地震…担当者 E
 - (2) 台風…担当者 F

(3) 火災…担当者 G

消火器の使用方法…H

(4) 避難警告レベルの説明…I

はじめは、1と2の内容が並列になっていたが、教員が「災害前」と「災害後」に分けることをアドバイスし、最終的にこの形となった。

ここでのディスカッションでは、日本の災害および防災案内に対する経験値の高い日本人学生がリードする形となった。小学校時代に配付された防災案内の紹介や災害時の放送などについての説明がなされ、必要に応じて黒板に絵を描いたり、スマートフォンで画像を探して回覧したりしている。

4-3 レイアウトの決定

レイアウト等は、教員から、①大きさをどうするか、②どのように使ってもらうか（携帯用か、自宅保存用か、壁貼付用か等）、③どのような形状にするか、④どの項目を何ページに置くかというディスカッション・ポイントが提供され、リーダーがクラス全体の意見をまとめる形で進行し、書記が決定事項を板書した。決定した内容は以下の通りである。

(1) 大きさ・どのように使ってもらうか・形状

主に携帯用としてA4かA3を4つ折りにして冊子のような形にする。A4かA3かは試作を見てから決める。

(2) どの内容をどのページに置くか

<用紙表面>

p1 表紙 p2 防災バッグ

p3 家具の事前準備 p4 避難場所

<用紙裏面>

p5 地震 p6 台風 p7 火災、消火器の使い方

p8 消火器の使い方、避難警告レベルの説明

ここでは、全部の内容を8ページに収めるためにはどれか2つの項目を同じページにする必要があった。それぞれの項目がどのぐらいの量になるかが分からない段階だったので、なかなか結論に達することができず、教員が「消火器の使い方」をp7の後半からp8の前半に置くことをアドバイスした。

4-4 試作・修正・完成

各自担当部分の試作を教員がまとめ、A4サイズおよびA3サイズそれぞれ4つ折りにしたものを準備し、修正箇所を検討した。検討の基準として、自分達がまとめた「[分かりやすさ]の条件」が使われた。検討は、①項目ごとにリーダーがクラス全体に意見を求める、②書記が板書する、③リーダーが修正箇所を確認するという順番で進行し、担当者は決定に従って修正することとなった。尚、用紙のサイズは文字の見やすさからA3が採用されている。

以下に「試作→ディスカッション→完成」の例をいくつか示す。

(1) 表紙

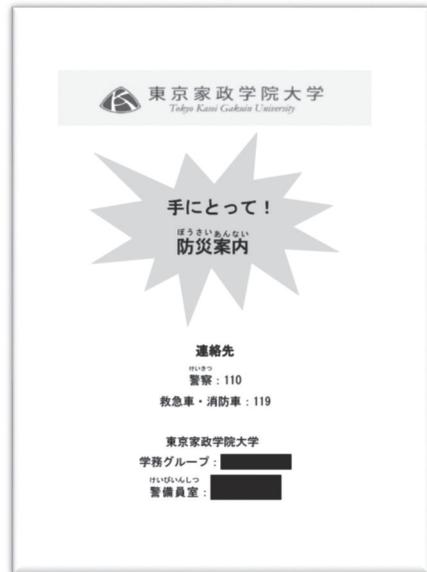
<試作>



<ディスカッションで指摘された修正箇所>

- ・タイトルをもっと目立たせる。
- ・「防災案内」「警察」「警備員室」に振り仮名をつける。

<完成版>



(2) 家具の事前準備

<試作>



<ディスカッションで指摘された修正箇所>

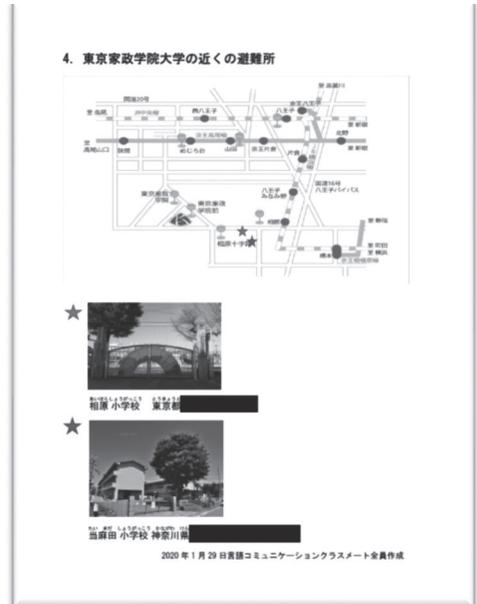
- ・見出しの表現がかたいので読む人に呼びかけるように変える。他の見出しも同様に修正して統一感を持たせる。
- ・見出しをもっと大きく目立たせる。

・イラストの説明は「ガラス飛散防止フィルム」等箇条書きになっており、実際に何をすれば良いのかわからないので、自分が行動する表現にする。

・下の余白が大きすぎるので全体をバランス良く。
 ・四つ折りにした状態で最後のページになるので作成者を入れる。

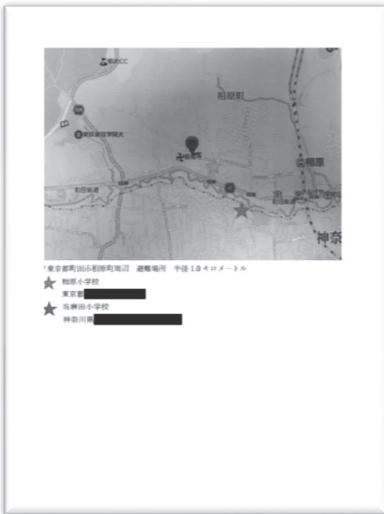
<完成版>

<完成版>



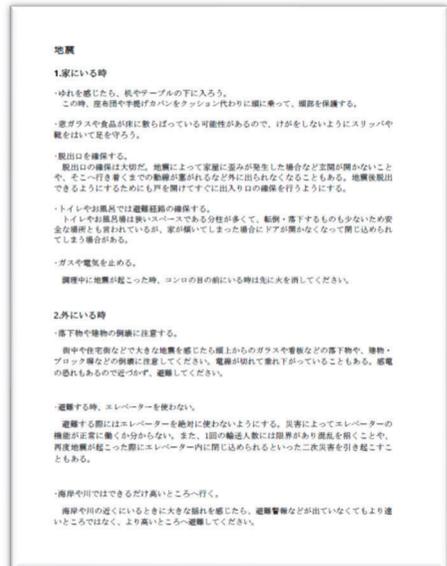
(3) 避難場所

<試作>



(4) 地震

<試作>



<ディスカッションで指摘された修正箇所>

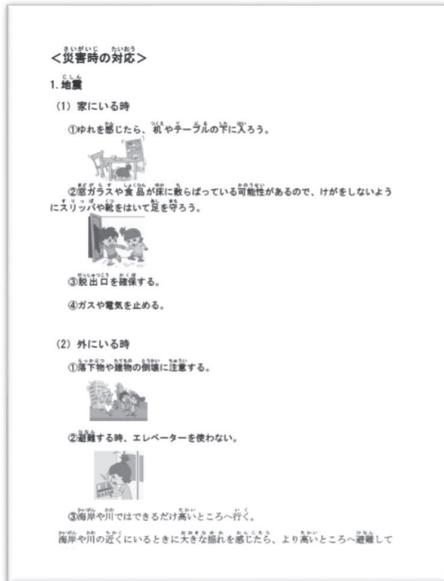
- ・地図が分かりにくいので変える。
- ・避難場所の名称に振り仮名をつける。

<ディスカッションで指摘された修正箇所>

- ・説明が長すぎるので、ポイントだけに絞る。

- ・1文が長すぎる。
- ・「避難経路」「輸送人数」など難しい語彙が多いので、やさしい言葉に置き換える。
- ・難しい漢字には振り仮名をつける。
- ・イラストを入れる。

<完成版>



以上、修正ポイントとして挙げられたのは以下の要素である。

A 日本語について

- ・簡単な文型と語彙を使う。
- ・一文を短くする。
- ・難しい漢字には振り仮名をつける。

B 提示の仕方について

- ・タイトルや見出しには大きな文字や色を使って目立たせる。
- ・イラストを使う。
- ・スペースの中に内容をバランスよく配分する。

これらのポイントは、「分かりやすさ」の条件の項目とほぼ重なっている。それに加え、自分達(素人)が作成したものを見ることにより、「分かりやすさ」の条件の分析の際には出なかった「統一感」や「スペース」についても気づきが生まれている。

ここでのディスカッションは、かなり活発で

あった。例えば、(1)表紙では、タイトルをもっと目立たせる方法として、黄色のギザギザに黒の文字にすることが提案され、ギザギザの具体的なイメージを提案者が黒板に絵を描いている。(2)や(4)の日本語の修正では、具体的にどのような表現にするかをクラス全体で考えた。(3)の避難場所の地図は、この様な地図が望ましいという具体的なアイデアが提案されている。

5. 考察

以上、多文化共生社会に必要な言語コミュニケーション能力を養成するプロジェクト「やさしい日本語」による留学生のための防災案内の作成について述べてきたが、最後に成果と今後の課題を考察していきたい。

まず、成果としては次の4つが挙げられる。

(1) 教室内「多文化共生の場」の実現

3カ国の国籍の学生がいることで、3-2で述べた「教室内の小さな多文化共生の場」が理想的なレベルで実現できた。それぞれ日本語母語話者の立場、日本語非母語話者の立場から課題に取り組むことができ、多面的な分析が可能となったばかりでなく、共通言語としての「やさしい日本語」への取り組みにリアリティをもたらした。また、ペアワーク、グループワーク、クラス全体でのディスカッションが、「多種多様な人々とのコミュニケーションを可能とするために言語を使う」というプロセスそのものとなった。

しかし、受講生の国籍や母文化が単一であっても、「日本語非母語話者が難解と感ずる点」の情報を教員が提供することで、多角的な分析は可能である。また、「自分と異なる意見を持つ人」とディスカッションをし、結論を導き出すというプロセスが多文化共生のための言語コミュニケーションの訓練となることに変わりはない。受講生の国籍や母文化に多様性がない場合も、今回認められた効果を生み出すことは可能だと考えられる。

(2) 学生の「気づき」による学びの実現

この授業では、教員による情報提供を最小限にして学生の気づきに任せるという方法を取った。授業前には、「やさしい日本語」がどのようなものか、研究者による要素を全く紹介せずに受講生

に分析させることにやや懸念もあったが、結果は先行研究の内容と大きく変わらないものであった。的確な材料を用意し、適切な方法で分析をさせることで、学生の気づきを促せることが今回確認された。

知識を与えられることも重要だが、自分で気づいたことは後々にまで記憶に残る。「気づき」を促す方法として、今回の手法は他の場でも活用が可能である。

(3) 「理解」と「運用」両方の練習を実現

何事も理解したからといってすぐに運用には移せない。プロジェクトにおいても、「やさしい日本語」の条件を分析により知っても、防災案内の試作では十分には活かしていない。しかし、防災案内として形になったものを目にし、修正箇所についてディスカッションをしたことで、客観的な読者の目を持つことができた。修正後は、著しい改善がみられている。

(4) 受講生同士の密な交流の実現

ペアによる小さなディスカッションから始めて、グループワーク、クラス全体でのプロジェクトにつながる中で、受講生同士の交流が密に深まっていったと言える。受講生からも「自分の意見を伝える訓練になった」「国籍が違う人から色々な意見が聞けて勉強になった」「色々な国の人と交流ができて楽しかった」という内容の感想が寄せられた。

一方、今後の課題としては以下の2つが挙げられる。

(1) ディスカッションの時間の確保

ディスカッションの時間は余裕を持って計画したつもりだったが、実際には予想をはるかに超え、プロジェクトの進行は大急ぎであった。前述した通り、ディスカッションは「気づき」を促すための重要かつ有効な方法であるため、十分な時間を確保する工夫が必要である。

対策のひとつとしては、コース全体の内容を詰め込み過ぎず、削減することが考えられる。また、リーダーの采配や書記の動き方で時間短縮が可能な部分もあるので、リーダー・書記となるためのトレーニングを取り入れることも有効である。それ自体が、多文化共生社会に必要な言語コミュニ

ケーション能力ともなる。

(2) 「やさしい日本語」の運用の充実

今回は、防災案内を作ることで「やさしい日本語」を運用することができた。特に試作を全員のディスカッションで修正したことにより、大きく改善している。しかし、1回の修正では完成とまでは言えず、実際に留学生に配付するものとしては十分ではない。今後は修正の回数を重ねることで、受講生の「やさしい日本語」の運用力をさらに高めていきたい。また、1年次留学生にアンケートに協力してもらい、分かりやすさを評価してもらうのも効果的だと考えられる。

「やさしい日本語」は日本語母語話者が考え、非母語話者に与えるものではなく、一緒に作り上げていくことで共通言語としての実用性が高まる。今後も、同様のプロジェクトを実施していきたい。

参考文献

- 1) 庵功雄 (2016) 『やさしい日本語－多文化共生社会へ』 岩波書店 p.36
- 2) 伊藤晶子・中尾寿郎 (2015) 「災害時の情報伝達における「やさしい日本語」の使用について：2011年～13年度調査研究委員会第一分科会 大規模災害に備えた鉄道における情報伝達に関する調査研究 第3ワーキング」『Cybernetics: quarterly report 20(1)』 東京：日本鉄道技術協会特定部会日本鉄道サイバネティックス協議会・事務局 pp.14-20
- 3) 岩田一成 (2010) 「言語サービスにおける英語志向－「生活のための日本語：全国調査」結果と広島的事例から－」『社会言語科学 第13巻第1号』 p.82
- 4) 佐藤和之 (2016) 「災害下の外国人住民に情報を迅速に伝える「やさしい日本語」」『ガバナンス 182』ぎょうせい p.47
- 5) 松田陽子・前田理佳子・佐藤和之 (2000) 「災害時の外国人に対する情報提供のための日本語表現とその有効性に関する試論」『日本語科学 7』 pp.145-155

(受付 2020.3.27 受理 2020.7.7)